

「サウロの回心」

2024年02月01日

ところが、旅の途中、ダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と語りかける声を聞いた。「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「私は、あなたが迫害しているイエスである。立ち上がって町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが告げられる。」（使徒9：3～6）

キリスト教史において、サウロの回心ほど重要な出来事はない。後に、ギリシア名でパウロと言われ、彼の福音理解と宣教によって、キリスト教は世界の宗教に展開したからである。サウロの回心がなければ、キリスト教は現在のような形にはなり得なかつたであろう。著者ルカは、サウロの回心をドラマチックに伝えている。

サウロは、律法学者ガマリエルに師事し、律法を学び、誰よりも律法に熱心で、将来を囑望されていた若者であった。だから、律法とエルサレム神殿を蔑ろにする教会の信者たちを許せなかった。また、十字架で殺された敗北者のイエスをキリスト（救い者）と信じる信仰などあり得ないと考えていた。彼は教会を荒らし、信者たちの家々に押し入って捕え、牢に送っていた。ダマスコに信者たちがいると聞いて、大祭司から迫害許可の手紙を貰い、見つけ次第、男女を問わず、縛り上げ、エルサレムに連行しようとダマスコに向かった。その旅の途中、突然、天からの光がパウロの周りを照らし、彼は地に倒れた。すると「サウル、サウル、なぜ、私を迫害するのか」と語りかける声を聞いた。サウロが、「主よ、あなたはどなたですか」と問うと、「私は、あなたが迫害しているイエスである。立ち上がって町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが告げられる」という答えがあった。同行していた人たちは、声は聞こえても、誰の姿も見えないので、物も言えず、立ち尽くした。サウロは地面から起き上がって、目を開けたが、何も見えなかった。人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。サウロは三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかった。これが、サウロが復活したイエスとの劇的な出会いで、圧倒的な神からの呼びかけである。使徒言行録には、この出会いの出来事を3回も繰り返しているが、サウロが何度も語ったであろうことを、著者ルカの筆で書いたものである。サウロ自身が書いた手紙には復活した主イエスとの出会いについては書いていない。ただ、福音に触れた状況と思われることについて二つ書いている。一つは「きょうだいたち、どうか知っておいてほしい。私が告げ知らせた福音は人によるものではありません。なぜならこの私は、その福音を人から受けたのでも教えられたのでもなく、実にイエス・キリストの啓示を通して受けたからです（ガラテヤ1:11～12）」である。人を介せず、キリストから直接の啓示であると述べている。もう一つは「私は誇らずにいられません。誇っても無益ですが、主の幻と啓示とについて語りましょう。私は、キリストにある一人の人を知っています。その人は十四年前、第三の天にまで引き上げられたのです。体のままか、体の外に出るかは知りません。神がご存じです。（中略）その人は樂園にまで引き上げられ、人が口にすることを許されない、言い表しえない言葉を聞いたのです（Ⅱコリント12:1～4）」である。体のままか、外に出たかは分からないが、第三の天・樂園まで引き上げられ、口にできない、言い表し得ない言葉を聞いた。これらの言葉からも、特異な宗教体験をしたと想像できる。実態は分からないが、この回心がサウロを決定的に生まれ変わらせたことは確かである。